

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月14日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520104

研究課題名（和文） イスラーム化以前におけるインドネシアの法具に関する総合的調査研究

研究課題名（英文）

Survey of Indonesian Religious Objects Before the Conversion to Islam

研究代表者

伊藤 奈保子（ITO NAOKO）

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：20452625

研究成果の概要（和文）： イスラーム化以前におけるインドネシアの宗教儀礼に使用された法具を研究対象に、当地及びヨーロッパの博物館・美術館等 21 ヶ所の所蔵品、またジャワ島の遺跡における彫像・レリーフ等の調査研究を行った。その結果、密教儀礼の法具である金剛杵、金剛鈴一式が確認でき、その推定制作年代から、当地に 9 世紀には密教儀礼が行われていたと推察、また鈴杵の形状が「閉鋸式」（8～10 世紀頃の中部ジャワ）、「開鋸式」（10～15 世紀頃の東部ジャワ）に大別できることから、王朝の移行を示すものと考えられた。こうした法具分析が、アジアにおける密教の伝播、及びアジアの宗教美術を考究する上で、一判断基準になり得るものと結論づけた。

研究成果の概要（英文）： This project carried out a research on the Buddhism objects used at Indonesian religious rites before the conversion to Islam. The subject of our investigation was the sculptures and (carved) reliefs held by 21 museums and historical archives in Indonesia and Europe as well as those which found in the remains in Java islands. As a result of our research, we succeeded in finding a few sets of *Vajra* and *Ghaṇṭā* which are Tantric Buddhism religious objects. The presumed date of these objects is about the 9th century CE, thus this suggests that Tantric religious rites were practiced in the place concerned in the 9th century CE. Furthermore, the forms of *Vajra* and *Ghaṇṭā* are roughly classified into ‘closing prongs’ type (middle Java from 8-10th century) and ‘opening prongs’ type (East Java from 10-15th century). This classification corresponds to the period of dynasties transition. Therefore we conclude that this analysis of Buddhism objects presents a criterion for the examination of the transmission of Tantric Buddhism in Asia and Asian religious arts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	35,000,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：インドネシア・密教・法具・金剛杵・金剛鈴

1. 研究開始当初の背景

イスラーム化以前におけるインドネシアの宗教について、その詳細は明らかにされていない部分が多い。また、当地に密教が存在していた事実も現段階において、広く周知されていない。報告者は、インドネシア出土の大日如来1軀との出会いを契機に、インドネシアの宗教の解明を試みてきた。インドネシアの鑄造像・法具を資料に、当地に金剛頂経系の密教が存在していたことを論証、そして「法具」の詳細な考察が、インドネシア宗教史の解明に大きな役割を果たすものと認識、必要不可欠な研究分野である事を確信した。インドネシアの法具に関する先行研究は、Cutiwongs, Nandana. 1994. 'An aspect The Bodhisattva Avalokiteśvara in ancient Indonesia'. In *Ancient Indonesian Sculpture*. KITLV Press: Leiden.

が、法具のうち金剛鈴を取り上げ、他に、平成4～6年度科学研究費補助金（国際学術研究）「法隆寺献納宝物の源流に関する調査研究—とくに東南アジアに遺存する彫刻・工芸作品を中心に—」（研究代表者：東京国立博物館・奥村秀雄）、平成6～8年度科学研究費補助金（国際学術研究）「法隆寺献納宝物と正倉院の源流に関する調査研究—シュリーヴィジャヤ王国関連の彫刻・工芸作品を中心に—」（研究代表者：東京国立博物館・鷺塚泰光）、松本伸之、加島勝、関根俊一氏等による1994年7～9月『月刊文化財』370～372号に「東南アジアの美術・工芸品—インドネシアの金工品1～3」があげられる。いずれも個々の作品を扱っており、総合的に体系化した研究は認められない。そこで本研究では、インドネシアの法具に焦点をあて、当地の石像、鑄造像といった作例はもとより、寺院のレリーフ等も対象におき、博物館、美術館、遺跡を調査し、資料を収集したうえで、それらを詳細に分類し、考察を行うこととした。法具に関しては、インドネシアに限らず、インドをはじめ、東南アジアの他の地域に至るまで、総合的な研究がほとんど行われていないのが現状である。それゆえ本研究におけるインドネシアの網羅的な法具研究に意義が見いだせるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、インドネシアのイスラーム化以前における「儀礼や儀式等に用いられる法具（宗教工芸品）」について、その様式・形態・制作年代・出土地等の体系化をはかることを第一の目的におき、その成果により、未解明であるインドネシア宗教史の一究明を目指すものである。

法具とは儀式、儀礼に用いる「使う」道具

である。そのため、その法具の様式・形態等の詳細を明らかにすることは、当時の宗教儀礼、しいては宗教・信仰・思想そのものをも浮かび上がらせることを可能にする。しかし、これまで、海外に散在する資料の総合的研究はなされず、全体像の把握が困難であった。また分析においても、ヒンドゥー教、仏教、密教の3つの美術に精通していなければならない条件から研究が進まず、法具のもつ重要性がほとんど認識されぬまま見過ごされてきた。

しかし、報告者は、これまでヨーロッパ、及び当地の博物館等において、現地の鑄造像をはじめとする美術作品を調査した上で、法具が宗教を考察する重要な資料となりえることを一部拙著において論証してきた。

すなわち、インドの法具の実態がほとんど解明されていないなか、インド美術が伝播したインドネシアの法具の体系化は、その原型を知るうえで有用であり、また、インドネシアには、ヒンドゥー教、仏教、密教と、幅広い宗教に渡って法具が存在していることから、アジアにおける「法具の基準」になり得ることを確認した。

以上のように、本研究では、世界中に散在しているインドネシアの法具を焦点に、網羅的に調査を行い、より詳細に分析することでインドネシア宗教史に新知見を見出すことを目指すものである。そして、その法具の分析は他地域との作例比較を可能にし、最終的には、「アジアにおけるヒンドゥー教、仏教、密教美術の伝播・変容・展開」という大きな問題の解明につながるものと考えられる。

3. 研究の方法

現地とヨーロッパにおいて、3年間で5回の調査を行った。インドネシアの法具のうち、①ヒンドゥー教、仏教、密教など、あらゆる金属工芸品の資料収集を行った。当地の博物館（収蔵庫を含める）、美術館、資料館、調査機関等において、とくに金剛杵、金剛鈴、櫛、灑水器、香炉等の作例を中心に、測量、調書、写真撮影の基本データを作成し、②更に石像・鑄造像・寺院などの連続説話浮彫（レリーフ）についても同様に取組んだ。

そうして収集した膨大な作例を、経典等の文献資料を用いて、宗教別に細かく分類、個々の性格を正確に分析し、①②の比較検討を行いながら、インドネシアの法具の様式・形態・制作年代等の体系化をはかった。

平成21年度は、インドネシアのジャカルタ地域とジョグジャカルタ地域の調査を行った。ジャカルタ国立博物館では、単独の法具、法具を持した石像、鑄造像の資料収集を行い、ジョグジャカルタにおいては、ボロボ

ドゥール、ムンドウット、ロロジョングラン、サリ、カラサン、サンビサリ、プラオサン等の寺院のレリーフや、祀られている像の持物としての法具を重点に、また当地のソノブドヨ博物館等において、鈴杵をはじめ、水瓶など実際に儀礼に使用されたと考えられる法具の調査を行った。帰国後は、こうして収集した膨大な資料の整理、分析をデータ化することに努めた。

平成 22 年度には、前年度で得られた法具の分類の成果をもとに、とくに金剛杵・金剛鈴の形態の基準をもって、比較分析が行えるか確認する検証を、カンボジアにおいて行った。カンボジアを選択した理由は、仏像に金剛薩埵、ヘーヴァジュラ等といった密教尊像が確認でき、また書籍にて比較的保存状態の良好な「閉鉢式」の金剛杵が一例みられたことから、他に同系の作例が残存する可能性が考えられたからである。加えて、この地域の法具の調査は未着手であり、その分析は必須のものと思われた。国立ブノンペン博物館、国立アンコール博物館をはじめ、法具、石像、鑄造像、寺院のレリーフ等の調査を行い、帰国後は前年度と同様の作業に努めた。

平成 23 年度は、ヨーロッパの博物館等の調査、及び本研究の総括に中心をおいた。またオランダ、フランスにて資料調査を行い、本研究で導き出される論について、東南アジア美術史を専門とする研究者、学芸員達と直接意見を交換した。また、3 年間、調査を敢行したインドネシア、カンボジア、オランダ、フランス等の研究機関、博物館等に、本研究の報告書の作成、及び書籍出版に向けての写真掲載許認可を得た。

4. 研究成果

インドネシアの法具のうち、儀礼に用いられる金剛杵・金剛鈴について、中部ジャワ地域を中心に 8~10 世紀頃、鈴杵ともに切っ先の閉じた「閉鉢式」が、また東部ジャワ地域を中心に 10~15 世紀頃、切っ先の開いた「開鉢式」が制作されていることが確認できた。

これらは同時代の像の制作技術などに対応しており、前者は精巧な技法で水準が高い。仏像が、インド要素を強く反映し、とくに Gupta 期後期の影響が考えられることから、インドでは、初期に同様の法具が制作されていた可能性が考えられる。

後者は、像と同様、ジャワ固有の傾向が顕著となり、技法的な衰退がみられるようになる。また、ヒンドゥー教、仏教に属する五鉢鈴の他に、鉢部に様々な形状があらわれる。インドにこうした作例が現段階において確認できないことから、この様々な形式の発生については明らかではない。

このように鈴杵の「閉鉢式」から「開鉢式」

への変化は、それまで文献では判然としなかった王朝の移行、すなわち中部ジャワ地域におけるシャイレンドラ、マタラム朝から、東部ジャワ地域におけるクディリ朝への遷都を論証する貴重な資料といえよう。

また、金剛鈴には、密教を象徴するデザイン(標幟)が鑄出される四種三昧耶(金剛杵・宝珠・蓮華・羯磨)の鈴が 37 例、八種三昧耶(金剛杵・弓・鉤・チャクラ・剣・某・絹索・旗)など武器等が施されている鈴が 4 例確認でき、その制作推定年代から 8 世紀頃には、インドネシア中部ジャワ地域に密教が流伝していたことが導き出された。また八種三昧耶形の分析から、理趣広経系のマンダラに説かれる内容が関連していることも推察、そして鈴杵一式、椀、六器等の法具がみられることから、結界を引いた壇のなか、密教儀礼が行われていた可能性を導き出した。

また、遺跡については中部ジャワ地域のボロドゥール、チャンディ・ムンドウット等の像、レリーフの鈴杵を確認した。独鉢や三鉢の形状が認められ、それらは「閉鉢式」であった。また、8 世紀以降の金銅仏の金剛手、金剛薩埵、降三世明王等、石像の金剛手等の持物にも多数の法具が確認でき、分析の結果、鈴杵が五鉢の形状を帯びた作例はみな「閉鉢式」と考えられ、明らかに「開鉢式」を意図した作例は確認できなかった。東部ジャワ地域の像は現段階において、鈴杵が「閉鉢式」である。その理由は制作の容易さによるものか、定かではないが、単独の鈴杵以外は「閉鉢式」であらわされることが導き出された。

こうした鈴杵の分析結果が、アジアの密教伝播を推察する上で、基準となり得ることを、カンボジアの法具調査で確認した。検証の結果、単独の鈴杵について、東部ジャワ期の「開鉢式」が多く、中部ジャワ期の「閉鉢式」は現段階において見つけられず、また像の持物としての鈴杵においてもインドネシアと同様「閉鉢式」の傾向がみられた。カンボジアの鈴杵が「開鉢式」であることは、10 世紀以降、密教が東部ジャワより伝播した可能性が考えられる。すなわち、インドネシアの法具の分析結果が、東南アジア地域での密教の流伝を考察する判断基準となることがカンボジアにおいて論証できた。

このようにみると、アジア地域において、仏教、特に密教が伝播したと考えられる地域に、中国、韓国、日本等の早い時期「閉鉢式」の鈴杵が確認でき、タイ、カンボジア等では「開鉢式」がみられることから、前者の地域が後者に先んじ、密教流伝がされた可能性が高いと推察できる。

また、鈴杵以外の法具については、椀や六器、柄香炉、浄瓶等、また像の持物として、水瓶・数珠等の分析を行った。この成果も鈴杵同様、東南アジア宗教美術を研究するうえ

で、一助と成りえるものとする。

当時の儀礼に関しては、バリ島に、その一端をみることができる。すなわち 10 世紀頃からジャワ島よりバリ島へ、当時の信仰形態が伝播したと考えられ、現在バリ島の村落ごとの僧によって執り行われる儀式に、それらを見出すことができた。彼らは、プタンダ・シヴァ、プタンダ・ボダと称され、冠婚葬祭などの儀式を司り、法具に金剛杵と金剛鈴等を用いている。口伝による儀礼であるが、壇に使用される六器など日本の密教儀礼に通じるところがあり、今後の研究課題として重要なものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①伊藤奈保子、「インドネシアにおける思惟像の現存作例について」、『密教図像』、査読有、31 号、2012、刊行決定。

②伊藤奈保子、Study Report on The Ang Khna Monument アン・クナ調査報告、「コー・ケーとベン・メアリア クメール帝国東地区の二大遺跡群 クメール帝国地方拠点の都市遺跡と寺院遺跡に関する研究」基盤研究(A)、査読無、2011、114～119 頁。

③伊藤奈保子、海がつなぐアジアー日本の密教は何処から来たのかー、広島芸術学会報、103 号、査読無、2009、4～5 頁。

[学会発表] (計 5 件)

①伊藤奈保子、インドネシアにおける思惟像の現存作例について、密教図像学会、2011. 12. 7、於大正大学。

②伊藤奈保子、インドネシアにおける童子表現ー頭部背後の三ヶ月形ー、佛教文化学会、2011. 12. 3、於大正大学。

③伊藤奈保子、イスラーム化以前におけるインドネシアと日本の密教の関連性、国際日本文化研究センター海外シンポジウム、2010. 10. 6、於インドネシア大学。

④伊藤奈保子、イスラーム化以前におけるインドネシアの法具の一考察、豊山教学大会、2010. 11. 4、於東京護国寺。

⑤伊藤奈保子、カンボジア遺跡アン・クナの宗教的性格、佛教文化学会、2010. 12. 4、於大正大学。

[図書] (計 1 件)

①『インドネシアの宗教美術ー鑄造像と法具の世界ー』改訂版、法蔵館、2012、出版決定。
伊藤 奈保子

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 奈保子 (ITO NAOKO)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20452625

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：